

阿蘇野の民俗 (一)

加藤 泰 信

一 概 観

阿蘇野は大分郡庄内町に属し久大線天神山駅より大分バス阿蘇野線で約一時間、終点栢木(かやのき)まで約十六料、阿蘇野川(大分川の支流)流域の谷間に位置している。

川に沿った道路を中心として、南側に下から日ケ暮・十合野・永畑・伊小野、北側に上重(あげじゅう)・井原(井手下)・原中・中村・栢木・高津原の部落からなり、現在約二五〇戸である。面積四八・三平方料で庄内町の三四%を占めている。

旧藩時代は竹田の岡藩に属し、永畑の大庄屋羽田野氏の下に、井原と栢木の小庄屋が治めた。高津原・栢木・中村は栢木の古庄氏が庄屋であった。古庄氏はもと姫岳の倉木(現在竹田市倉木)より庄屋入れかえで当地に移転してきたものである。明治四年の廢藩置県で岡県となり、同年十二月大分県に統合され、同八年直入郡阿蘇野村と改称された。昭和二十五年直入郡より大分郡に編入され、さらに昭和二十九年十一月一日、阿南村・南庄内村・東庄内村・西庄内村と共に五カ村が合併し庄内村となり、同三〇年四月一日庄内町となって現在に至る。従って直入郡方面とのつながりが強く、都野や長湯との交易があり、結婚の為の嫁入道具などは竹田で調べていた。又、位置的に玖珠郡九重町方面や大分郡方面との関係も深い。

中村・栢木・高津原の氏神は直入中臣神社で、井原・上重方面は阿蘇野神社が氏神である。その他の神社としては氏神ではないが、日ケ暮に天神様をまつてあり、栢木には森山八幡社がある。寺院は十合野に西宝寺、中村に了承寺があり、いずれも真宗で都野(直入郡)のミョウエン寺の門徒もある。姓は佐藤・工藤・大塚姓などが多い。

生業は農業が主である。棚田がよく整備され、水が豊富である。海拔六〇〇米（栢木付近）で水は冷たい。冬は相当な積雪があり、かつてはツマグツ（藁靴）を履いたといわれる。山林・原野の面積が広く、林産では杉・松材・椎茸等が多く、最近 は牧野改良で畜産振興を行なっている。

二 年中行事

(1) 正月の準備

〔すすはらい〕 すすはらいという名称はないが、大掃除を餅搗き前にしたので、その時天井のすすを払った。
〔十二月二十日〕 オトヨリ。年末最後のヨリをオトヨリといい、総決算をする。以前は庄屋、区長の家に集まったが、今は公民館で行なう。この時新年のハツヨリの場所を決め、一杯の費用を各家より出す。借錢払いは二〇日に金主のもとに行つた。利息は年利一割から一割五分で、五円以上は借用証書を書いた。一〇円借る時は必ず酒一升は持って頼みに行つた。正月の月は金主は金を貸さないし、借る方も縁起が悪いといつて借金しなかつた。如何に苦しくとも松がオレルまでは借られんといひ我慢した。

〔正月買物〕 セッキガイモンという。セッキガイモンは湯ノ原（直入郡長湯温泉）の商店まで峠を越え、日帰りて馬を曳いて行つた。往路は酒樽を積んで行くこともあつた。

歳暮用の品は足袋・手拭・腰巻や袖口に使うネルを、二十九日までに特に厄介になつた家に子供に持たせて贈つた。年内に嫁を貰つた家では嫁の親元へシヤケ（鮭）二尾のカケウオをする。媒酌人にもカケウオをする。入口に下げるので、小さい場合は体裁が悪く、出来るだけ大きいものを買うため無理をした。これはトントリ前に必ず行なつた。

砂糖は減多に使わなかつたので、正月用でも四分の一斤から二斤程度を餅用と子供のぜんざい用に買つた。地元でも売つてゐる店があつたが、十斤の砂糖がなかなかはず、十斤買う人には一斤につき十二銭、二斤までは一斤十五銭と段階をつけて

売った。年寄は非常に辛抱して「砂糖はすかん、塩縮の方がよい。」とやせ我慢した。黒砂糖を使い、白砂糖はまだ出廻わっていないかった。

石油もやはり地元の店で扱っており、一斗買いが一円五十銭であった。日露戦争頃は一般家庭ではカンテラを使っており、マッチも減多に使わず、ユルリの火から火種をとって点火した。出征兵士の壮行会にはランプを使っていたが、家庭では普段使わず、その後になって普及した。昭和に入る頃電灯が付き、竹田の発電所から送電してきた。

正月用の晴着を特に年末作ることはなかった。

〔餅搗き〕 正月用の餅は二十五、六日頃から搗く。午の日は「火がハジカイ、かまどが荒れる。」と行ってさげ、火災が起こることを心配した。白は大黒柱と同じく樫が多く、一白は二升が標準である。餅搗きにはトシモチ（手ぬくめ餅）といって特大の餡餅を作り、家族全員で食べる。他家より早く搗いた家で気のきいたところは近所・親戚に手ぬくめ餅を二個ずつ配る。貰った家は後で搗いた時「まあぬきうち食べておくれ。」と行ってお返しをする。

搗いた餅はしばらく広げておき、カマゲに収めて、客があると出して食べる。年末はカキ餅切りなどで忙しくなる。

〔豆腐、昆蕪など〕 餅搗きのあと豆腐・昆蕪を作る。昆蕪玉は沢山植えていた。年末の豆腐は二箱程作った。にがりは塩カマゲ（カマス）をザルの上において自然に溶けて落ちるものを使った。塩は大分まで駄賃取りで米を馬につけて出した婦りに買って来た。大分までは約四〇斤あるが日帰りであった。家の者が天神山に用事があって来る時は、女は朝の仕度で夜は落着いて眠れなかった。

以前は大抵の物を自家で作ったので醤油・味噌も醸造した。醤油は二番醤油までとり、あとは牛馬に喰わせた。一石以上には税がかかった。味噌は今でも作っている。女が遠出をすることは減多になく、海を見ずに死んだ人も多かった。まれに大分などに出れば「味噌樽がヨン出た。」といていた。

〔十二月二十五日〕 セッキヒマトリ。

〔大晦日〕 門松を入口の両側に立てる。

材料は松とツルである。ツルはシャクナゲの葉を大きくして丸味をつけたような葉をしており、茎と葉の裏が赤である。松とツルは神棚にもホカウ。床の間（トシトリ様）には餅と米を供え、鍬・鎌などの農具やニグラなど牛馬の道具に紙でひねった餅と共にツルと松をホカウ。神棚・仏壇・大黒様・荒神様にオカザリ（鏡餅）を供え、牛馬の神様のダイジョウゴン様にも家からホカウ。

料理の材料は数の子・昆布・ネザ（メザシ、唐人干）、醬油で加工した吸物用の兔・塩鮭・野菜類である。塩鮭は自分の萩原からザルをカタゲた行商人が売りに来ていた。トシノヨは酒を飲み、小さくとも一匹魚（尾頭付き）を食べる。これをトシトリという。

〔元日〕 若水汲みをする。本来は主人が汲んでいたというが、若いもんが汲むと運がよいという。水の中に福の神がいるからそれを汲んで神様にお茶を差し上げなさいという。

「年の初めの年男、万の宝我ぞ汲みとる。」と唱え、柄杓を持って汲む。神棚に供え、残りは茶をおかず。罐子の中に一二銭落とし、「お前が汲んだ水が金になった。」といい、子供の小遣とした。干柿を食べて歯固めをした。歯固めは三十一日にする家もある。

主人が神酒をあげ、女が小餅を焼く。餅はふくれて大きくなったものがよいという。

氏神に詣る。昔は庄屋の家で年始をした。その後年末のオトヨリの時、年始の座元を決めるようになり、各戸より戸主が集まって年始をした。今は公民館で行なう。

〔二日〕 早朝、床の間に供えていた米をアキホに撒き、畑に出てクワイレをする。茅と松を一語にイツケて土間に飾り、それを畑に持って行き、突刺して楯にみため、鍬をおろして土をかける。そのあと鍬の尻を三度たたく。朝の空気を破って、あちこちから鍬をたたく音が聞え周囲によく響いた。風が吹いて茅が倒れると「今年は年がよい。」という。鍬入れが終ると家に帰りナイズメをする。藁をしめしてモーガのヒキョー（引緒）・ワタシ（左右に引く綱）・ユグラなど牛馬の道具

の繩をなう。最初に出来たものは床の間に飾る。女は朝早く針オコシをして縫初めをし、子供は書初めをする。書初めは男が終わってから女の順に書く。

フクガリ。薪とりに山へ入る。新しい木を切り、オーコでカタゲて帰り、門口など見える所に飾る。

〔三日〕 初正月の家では親を伴って嫁の里へ行く。一斗餅を一重ね持参する。嫁の在所は、十一日の鏡開きはその餅を短冊型に切つてミズヒキをかけ、親戚近所に配る。切口が小さいと近所に恥かしいので皆奮発して大きい餅を持参した。媒酌人にも贈った。養子の場合はその両親に二重ね、片親の時は一重ね贈った。

〔五日〕 仕事休み。

〔七日〕 七草ゾースイを炊くものだといわれていた。昔は日常、よく雑炊を食べていたと伝えられている。良い米は年貢米に竹田まで納めていたからだという。

〔十日〕 ハツヨリ。年間の行事やムラの共同作業を欠席した時の日当、男の代わりに女が出た場合はどの程度の銭を出すかなどを決める。

久住の金比羅様に詣る。ヨッテ一杯飲んでいた。

〔十一日〕 カガミビラキ（綱かざり）。

・ 供えていた餅を下げて女が焼き、男は綱かざりをして餅を食べる。ぜんざいを作る。

帳開き。和紙を二つ折りにしてコヨリを通して綴じ、神棚に供えてオミキを上げる。カラオロシにした大根ナマスで一杯飲む。
〔十三日〕 ダイジョウゴン（大將軍）様の祭り。牛馬の関係者は篠原（大分郡挾間町）の大將軍様に詣る。篠原に行けない時は都野の板切観音に参る。

〔十四日〕 モグラ打ちはしない。三浦家では本家に集まり酒宴を開いて系図祭りをする。

〔十五日〕 十五日ガユを炊く。小豆飯である。トボサクをする。篠竹の筒に千枚通しや錐で作物名を書き、アズキガユの

中に入れる。小豆が二粒入ると小豆や大豆などのコモノが豊作で、米が多く入っていると今度は稲が豊作だと占う。又、炊飯中に茅の穂をアズキガユに突っ込んでネバリをつけ、品種別に分けたモミガラをそれぞれの茅の穂にふりかけ、余計についたモミの種類（モチとか農林〇号とか）がよく実するという占いもする。品名を書いた紙をカモイに下げておく。

ツキヤキ（月焼き日天気占い）をする。大豆をユルリのふちに十二粒並べ、右から左へ順に一月から十二月に見立て、黒く焼けるとその月は雨が多いという。六番目の豆が白いと六月は雨がないと判断する。

「十六日」 松をおろして他の新しい花とかえる。山仕事に行くものではないという。「山の神様が味噌を作るのでその香りを嗅ぐと倒れる。」という。

「二十日正月」 ハツルハツカ。「山に行くとならん。病気で倒れる。」という。この日は仕事ヨコイである。鏡餅を雑煮にして食べる。

「二十三日」 三夜様。正・五・九月の二十三日に三夜様をする。座前の家に夜集まり、「人ゴター言ウテン横寝ハスナ」といい、夜遅くまで起きていた。

(2) 春から夏

〔初午〕 竹田のコウトウ様に詣る。

〔彼岸〕 彼岸団子を作りお寺詣りをする。

〔雛節句〕 草餅と白餅で菱餅を作る。嫁の在所と親戚・媒酌人に配る。餠餅の上に菱餅を載せ、桃の花のつぼみを入れ、サカイ（長方形の重箱）一重を贈る。嫁の在所からは雛人形を贈る。

〔お接待〕 三月二十一日と七月二十一日はお接待である。赤飯の握り御飯とお煮メを作り、五軒組・七軒組などのグループ毎に、通りかかった人にお接待をする。

〔苗代〕 この頃、修繕方が通知をして井路の修理をする。

〔五月節句〕 鯉のぼり・鎧・甲を飾る。粽で祝う。菖蒲を入口の茅屋根にさす。菖蒲は頭や腰に結ぶと頭の病氣や腰の病氣をしないという。

〔サナボリ〕 田植の終わったことをサナボリという。田植終了と共に主人が田植歌を歌い、植えたばかりの苗を三株引き抜き土を洗い落して持帰り、荒神様に供える。抜いたあとには別の苗を植えておく。油塲寿司を作り、酒を飲んで祝う。田植前に一日休む。これを「地獄入り」という。田植ヨコイは三日間とる。田植後セキ参り（北海道郡佐賀関町の権現様詣り）をする。

〔半夏〕 ハンゲが来ると田の水が出る。梅を食うと頭が禿げるといふ。水は常に豊富である。

〔雨乞い〕 この付近の水源池はお池でワクド池とヨシが池があり、ヨシが池は早魃でも膝まで水がある。水が十分あるので雨乞いをするとはなかったが、下竹田や庄内など他の村から水を貰いに來ていた。お池の水を持帰って田に入れば、何日間かこの水が涸っているので田が干らんといわれていた。阿蘇野の方ではお池に見知らぬ者が來ると大雨が降ると言伝えられており、水も十分だから大雨は困るので、無断で他村からの立入を断わっていた。立入禁止の立札を道端に立てることが再三あった。又、女郎石にさわると雨が降るといふ。昔、源平合戦のあと黒嶽と大船の間の窪地に平家にゆかりのある女共が逃げ込み、主人に磔を立てるため男を近づけなかったのを引っぱり出して首を切った。その後、彼女達の霊が崇つて土地の人々が難儀をしたのでその地に地蔵を立てて供養した。それを女郎石といっている。他村の者が雨乞いにお池に詣つたついでに近くの女郎石迄足を伸ばし、さわって帰ることが多かった。

〔風止め〕 神官と総代が氏神様でお祓を上げ、オミキを供える。

〔虫追い〕 「実盛追い」といふ、病除けをする。ムラ境に注連繩を張る。斉藤実盛が稲株に足をとられて転び手塚太郎に討たれたので彼の霊が虫になり稲に害を与えるという。ムツカラ（麦稈）に火をつけて燃やし、松明を持ってムラ境まで追い封ずる。

〔土用〕 大掃除をする。丑の日は白水に行き鉱泉につかる。病気にかからないためである。白水鉱泉は黒嶽の二合目付近にあり、胃腸病・神経痛・皮膚病その他に効能あり、飲用・浴用に使われる。現在は水道で高津原まで引いている家もある。

(3) 盆

〔七夕〕 七日の早朝、子供が里芋の葉に溜った露を取って墨をする、白や色紙の短冊に和歌を書いた。字が上手になるという。笹は大人が新竹を伐り、小供には伐らせない。笹竹は川端や井戸端に立てそのまゝにしておく。溝さらいをして塩で清める。サナボリに持帰って荒神様に供えていた三株の苗で仏具を洗う。七日に墓掃除をする。竹を伐り花筒を作って水を入れた手桶を持って行く。「喉がかわいて水が欲しかろう。」といい、石塔に水をかけ花を供えてロウソク・線香をたき、参って帰る。以前は墓掃除のあと一杯やっていた。墓地に植わっていた大きな松を切って売り、その金を郵便局に預けてその利子を金主が預り、皆で集まって飲んだ。一升五合程であった。

〔盆〕 盆は十三日と十四日の二日間である。墓地へ精霊迎えに行き、墓前の火を持帰り仏壇に点燈する。墓地では新しい花ととりかえる。新仏のある家にお伺いをする。十三日は精霊様が帰って来るので、縁に提灯を下げ戸を開放しておく。子供を泣かせると家庭のしまりがこんなに悪いのかと精霊様に歎きを与えるので特に気をつける。

供物はトウモロコシ・ナス・木瓜などである。うちの嫁は働き者であると先祖から賞めて貰うため立派な出来のよいものを供える。

料理は精進料理のみで生嗅いものは一切使わない。盆鱒を食べる所があるという話は阿蘇野にも伝わっているが使用しない。新仏のない一般の家に来た客は「中元おめでとう御座居ます。」と挨拶する。来客には酒を出してもてなす。

〔十四日〕 お精霊様が供物を持帰るといふことで、カルイ紐の代わりに手打ちうどんを午後作る。六時から七時頃、提灯に火をトボして送っていく。「間違いがあってはならん。」といい、分かれ道や野道には提灯を立てる。

〔十五日〕 初盆の家では盆踊りを行なう。初盆が何軒もある場合には抽せんで順番と時間を決める。盆踊りの練習は六月

二十九日から始める。

〔十六日〕 今の公民館前で戦死者の慰霊のため踊る。

(4) 秋から冬

〔八朔〕 早朝、主人がサクホメに行き、水口にオミキを供える。小豆飯を炊いて神様にお礼をする。八朔の神は天から下って作物を実らせて礼を受けたので帰るといふ。

〔八月十五日〕 名月。オダゴ(団子)、イモ・トウモロコシを箕に入れ、臼の上に置いて供える。月があたりさえすればよいと言ふ。子供達がひきに来る。家の者が気付かぬうちに引いた子供は知恵が多く賢くなるという。

〔九月十日〕 十・十一日は石神様(氏神)直入中臣神社)の祭りで御幸祭という。十一日夜にお帰りになるか、この日は岩戸神楽がある。この岩戸神楽は大野郡の方から伝えたとされる。

〔九月十五日〕 ホン名月という。団子・枝豆・栗・焼米を八月十五日と同じ要領で供える。この日は木に実っている果物でも黙って取つてよい。

〔鎌上げ〕 シノが終わると鎌上げである。赤飯・マゼ御飯を炊いて祝う。米は水車の臼ですり、小野屋の㊦の小野氏の家で俵の検査をした。明治末頃、白米一升が十二〜三銭で葉書が一銭五厘、封書が三銭であった。

〔亥の子〕 十月最初の亥の日に亥の子餅を揚ぐ。子供達が「亥の子打ち」をする。ワラボテ(藁束)を打つ時、「コンサの子を祝わん者は鬼産め、蛇産め、角生えた子を産め。」という。家の者が「今晚の亥の子打ちは何人か。」と聞くと、子供達は大抵人数の倍の数をいう。オナゴは「鬼産め蛇産め。」と言われたのでそういうことにならぬ様必死になって餅を沢山渡す。そうすると子供達は「ここは分限者、貧乏神は出て行け、福の神が入つてきい。」と餅を貰つた礼の氣持を込めて囃す。

〔冬至〕 ボウブラ(南瓜)を食べる習慣はなかった。

三 口頭伝承

〔石神様（直入中臣神社）伝説〕中村にある中臣神社は石神様といわれている。景行天皇が大野郡の土蜘蛛征伐をした際、府内の神宮寺浦に上陸し、大分川沿いに上流へと平定していった。戦勝祈願のため直入中臣社に参詣しようとした時、何人かの賊が石矢を投げたので参ることが出来ず、難をさけて他所に泊った。その夜、天皇に神勅があり、西方にカズラモノ（クズマタ）があり、その中に火を吹く木の株がある。それを持って来れば目から口から火を吹き、賊をさけることが出来るとお告げがあった。そこで家来を派遣して捜した所、葛小野（阿蘇野にある一地名）にあったので持ち帰ると、火が出て賊が退散した。それから土蜘蛛征伐の祈願をして、もし退治出来るようになればお宮にあるこの大きな石を動かしてもらいたいと願うと、その石がぐらぐら動いた。こうして景行天皇は土蜘蛛征伐を成就し、中臣神社は石神大明神、石神様と呼ばれるようになった。天皇の戦勝祈願にちなんで大庄屋の羽田野進之丞が獅子舞を作った。木の株が獅子に似ていたといわれ、今日中臣社の獅子として伝わっている。

〔黒嶽白水伝説〕この村に猟師がおり、ある時猟に出て夜になり、黒嶽で道に迷った。どこか家はないものかと捜すと、彼方に火が見えたのでその方に行くと家が一軒あった。中を見ると爺さんがいたので、猟師は「暗うなって道に迷ってしまつたので一晩宿を借りたい。」と頼むと、爺さんは「今晚は色々とりこみ中で無理だが貸そう。その代わりにのぞき見をするとはならんぞ。」といい、泊めてくれることになった。猟師は鉄砲と犬をくりつけて家に入ると、爺さんは「食べ物は別にないからこれをやろう。水一杯飲めば腹一杯になる。」猟師は貰った木の实一つを食べて横になった。

夜中に餅搗きの音がするのでじっと聞いていたが、とうとうたまらなくなつて約束を破つてのぞき見をすると、天狗達が集まって餅を搗いていた。搗く者、餅をちぎる者、がやがやと楽しそうに話し合っていた。

朝になり、木の实を一つ貰つて食べ満腹して帰ろうとすると、さっぱり方角のけんとうがつかない。犬は死んでカラホネ（白骨）となつていた。びっくりして爺さんに尋ねると、「そりやそうだ。お前は一年間も眠っていた。約束を破つたからだ。

もう家に帰れ。」といわれたが方角がわからない。「それじゃ俺が米のとき汁を流すからそれに従って帰れ。」

お礼をいって米のとき汁に沿って帰った。自分の家に帰ってみると親戚が皆集っていた。何かと尋ねると、本人が一年も帰らないので死んだものとして葬式をとくに済ませ、今日はムカワリの法事で集まっているということだった。髪は伸びほうだい、鬚ぼうぼうで別人のようになっていたので皆がわからなかったが、やっと風呂に入ったり身を整えてから認められた。この獵師は現在の佐藤姓の祖であろうと伝えられている。地中にしみ込んだ米のとき汁が白水鉾泉として湧き出したということである。

〔朝日長者と大蛇など〕

九重飯田の千町無田に朝日長者といわれる金持がいて、ウシロ（後）千町・前千町の田を持っていたが水があたらぬので阿蘇野のお池に住む大蛇に田植が出来るように水乞いをした。そして願をかなえてくれば、長者の娘三人のうち一人を差上げることを約束した。すると一晩のうちに水が上に流れ、前千町・後千町の田に水があたっていた。長者は約束通り娘を差出すことにして、長女に行くように言ったが、上の姉は勘当されても大蛇の所へなどは行かないといって断わった。次女に言うところの娘も「私も姉と同じ気持で行かない。」と長者を困らせた。すると三女が「今迄、長者の娘といわれ大事にされて来たが、親に孝行もしていないから私が行きましょう。その代わり一つお願いがあります。家にある法華経七巻を戴きたい。」といい、話が決まった。

長者は姉二人に米を入れる袋を作らせ、それを持たせて追い出した。二人は途中の山まで来て、見おさめだから家の方をふりかえると、急に大地が回り出して渦が巻き、土俵位の穴が出来て二人共その中に巻き込まれてしまった。親の罰があつたのである。

一方、下の妹は駕籠に乗せられお池迄来た。付人達は筏を作つて娘を乗せ、湖の中に追出した。すると黒嶽の麓から大蛇が火を吹きながら出て来た。家の者達はあわてふためき逃げ帰つたが、その時持っていた杉の木をさかさにつきさした。今、水

源池の下ノ沢に残る周囲一丈程の杉がその時の杉の太ったものであるという。

大蛇は一呑みにしようとして襲いかかってきたので、娘は「一寸待て。」といい、大蛇が筏に頭をのせて待つ間に法華経一卷を読み、さらに二巻・三巻と七巻まで読むと、大蛇の角が落ち女の姿となった。それは以前姫様につかえていた下女であった。「何故そんな姿になったのか。」と娘が尋ねると、下女は「長者の家に仕えている頃、人が米借りに来た時など、一升貸せという時には八合貸したりしてずっとヘソクツテ悪いことをした。それでオロチになり、昼七回・晩七回身が焼けて暑くてたまらず、水の底に沈んだのです。」と答えた。やがて娘は下女を連れて家に帰ってきた。

その後、娘は養子を迎えることになった。平川（玖珠郡）の夕日長者から養子がきたが、正月歩きに平川へ帰る時、三石三斗の餅を掲ぎ、牛馬につけて贈った。その返礼として来た餅が小さな鏡餅であったので、朝日長者は鏡餅にすれば人に見られて恥かしいということで、さけて畑に供えた。そしてその餅を的にして長者が弓を射つと、的は三つに分かれ、一つは白鳥になって九重町のシラトリ大明神となり、もう一つは小国（熊本県）にとび、落ちた所に穴があいて水が出た。これが小国池である。他の一つは阿蘇野の鏡山となった。長者は餅を的にしたり、田植の時に仕事が終わらないので西に沈みかけた太陽を戻したりした報いに罰をかぶって、家に怪物が出るようになり、没落して長者のみ残った。まだ残っていた財産があったので、惜しがって下男に命じ、朝日もあたり、夕日もあたる場所に金を埋めさせ、その後埋めた場所を知っている下男を殺してしまった。

ある時六部が飯田を通りかかり、日が暮れたので庄屋に宿を頼んだが、「今夜は差支えがあり泊めることが出来ない。」というので「それでは野宿せんならん。大木でもないか。」と尋ねると庄屋は「少し行くと長者屋敷がある。今、空屋になっているからそこに泊れ。」と教えた。蜘蛛の巣のかかった屋敷に寝ていると、大きな音がして生ぬくい風が吹いた。髪はぼうぼうの年寄が出て来たのでロクブガ誰何すると、「わしや長者でもう死んだが、朝日もあたり夕日も輝く所に金を埋めてある。それを世の中に有益に使うように。」といい、戸を閉めて次の間に引込んだ。

夜中に自在カギから蜘蛛が下がって来た。六部が弓で射ると、「ギャッ。」という声を出して逃げた。夜が明けてみると血液が点々と外へ続いており、それをたどって行くと岩に向かっており、そのむこうに洞穴があった。中をみると鏡のような二つの目があり、うめき声が聞えた。六部は躍り込んでその怪物を蹴倒しそれを刺殺した。長者はこの怪物に財産を取られ没落していたのである。長者屋敷は九重のトシノカミにあったのではないかといわれている。

〔民謡〕 よいやな。よいやなは直入郡都野と長湯及び阿蘇野の民謡である。結婚式には特に歌詞が相手にあり盛んに歌われる。即興の歌詞も作られる。結婚式では「高砂や」の終わったあとよいやなが出される。

阿蘇野名物

阿蘇野よいとこ一度はおいで

西は黒嶽・白水鉱泉

秋は紅葉の紅の花 ヨイヤナ

白水よいとこ一度はおいで

春は椎茸わらび取り

黒嶽裾でにシヤクナゲ

夏は白水鉱泉、秋は黒嶽鹿の声

赤い紅葉の山、冬は降る雪、雪見嶽

阿蘇野黒嶽名山なれば、鹿が鳴く鹿が鳴く
寒さで鳴くか、妻呼ばか。妻も呼ばねば寒くない

明日はお山のしる鹿狩り

助けて給え山の神

この子が成人したなれば連れて参詣いたしましょう。

ヨイヤナ

(以後はヨイヤナ保存会の婦人学級による。)

一般宴会(祝儀)に歌う歌

四海波にて御身の上は

心静かに身を持ちなされ

君の恵はありがたや

ヨイヤナ、(小謡の式三番に相当する。)

コヨサ(今宵)この家の御取持は

金の島台黄金の銚子

下さる御酒(ごしゅう)は保命酒 ヨイヤナ

今宵呑む酒(ささ)いつよりやうまい

銚子からかな盃からな

又はあなたのお手からな

ヨイヤナ(この歌を酌人が受けた場合は四つあとのあなた様とは音には……を返してもよい)

此の小つばに小鳥が一羽

何とふけるか立寄りきけば

お家繁昌とふけます ヨイヤナ(客側の歌。建築祝い等の家ほめにも歌う。)

私は田舎のすず山育ち

歌も知らねば口上も知らぬ
お客あいきようも尚知らぬ

ヨイヤナ
(前の返歌)

八十八とはあなたのことよ

係が杖と子嫁女が手引き

さぞやあなたは嬉しかる

ヨイヤナ
(老人に贈る歌)

あなた様とは音には聞けど

一つお座では、今宵が初よ

これを御縁に頼みます
ヨイヤナ
(初めて宴会で会った人に贈る)

旅にお一人ふびんな様よ

頼りないならわしや通りやせん

互に頼りつ頼られつ
ヨイヤナ

新築祝いに歌う歌

ここのお家はよう建ちました

柱金銀桁まで黄金

軒にさがりし金すだれ ヨイヤナ (主人に送る歌)

今日の喜びや皆のおかげ

私一人じゃどうにもならぬ

ごゆるりのんで下しやんせ ヨイヤナ (前の返歌)

結婚祝に歌う歌

貰い受けたる白歯の娘

連れて帰りて枝折りそえて

八重の椿と眺めたい ヨイヤナ (嫁の家で貰い方が歌う)

淋しう御座んす我ふるさとは

今日か明日かと指折り数え

みつめ帰りと待つばかり ヨイヤナ (右の返し歌、親又は兄弟が歌う)

貰い受けたる花嫁様は

疎略にやしませぬ大事にします

気づかないさるな親御様 ヨイヤナ (嫁を貰いに行った人が両親に贈る)

あの娘両親ふところ育ち

西も東わからぬ程に

万事よろしく頼みます ヨイヤナ

(前の返し歌)

あなたお近所お隣りそうな

まだあの娘はものなれませぬ

万事よろしくたのみます ヨイヤナ

(新婦の親が客に頼む歌)

いとしかわいと育てた娘

今宵この家にお連れになれば

さぞやお里は淋しかろ ヨイヤナ

(前の返歌)

蝶よ花よと育てた娘

今宵あなたにあげます程に

末はよろしく頼みます ヨイヤナ

(新郎に新婦の親又はその代理が歌う歌)

菊に蝶々まささきの菊よ

縁は長くと神さんかけて

深き契りをたのみます ヨイヤナ

(前の返し歌)

蝶よ花よと育てし娘

今宵この家下さるからは

さぞやお里は淋しかろ ヨイヤナ

旭かがやく息子を持てば

夕日かがやく嫁女をとりて

さぞや親様うれしかろ ヨイヤナ

(新郎、新婦をほめる歌)

今宵おいでの脇立ち様よ

どれがくずの葉さかきの葉やら

間違いましたよお客様 ヨイヤナ

(嫁脇の婦人に贈る歌)

私や田舎の岩端のつつじ

露にほころび身はいたずらの

こんな名所じゃはずかしや ヨイヤナ

(前の返歌)

歌情

台のまわりに菊うえて

それに花咲き実のなるまでは

互い心は交すまい ヨイヤナ

あなたきれいなちめん花よ

一重花じゃと身を打ちかけて

折りて見たれば八重桜 ヨイヤナ

付記

十月十、十一の両日、阿蘇野地区の調査に出かけた。話者は高津原部落の三浦重夫氏（七十八才）・吉野シズエさん（七十才）、栢ノ木の後藤イツ代さん（七十四才）でした。終日御協力を載き、お話下さって有難度う御座居ました。また栢ノ木の古庄義泉氏御夫妻には、御多忙中のところを一方ならぬお世話をして載きましたことを深く感謝申し上げます。

（大分舞鶴高等学校 大分市高見八組）